

有感

西村 英一

大平さんは、もともと学究肌で、哲学的にものを考えるタイプの人であった。それに、クリスチャンであったせいであろうが、政治の場でも宗教心を大切にしていた。だから人に対しては、柔らかく、慎み深い態度で接し、己に対しては厳しく律していた。外柔内剛の人であったといえよう。

私は、大平さんが自由民主党の総裁になられたあと副総裁としてともに歩んできたが、その人となりについて非常に感心するところが多かった。

歴代の総理大臣は、政権を担当すると、それぞれの政治姿勢や政治路線を明らかにしてきた。池田さんは、「寛容と忍耐」を政治姿勢とし、「所得倍増」を政治路線とした。佐藤さんのときは、「寛容と調和」、「社会開発」であった。大平さんは、「ウソのない政治、正直な政治」を政治姿勢とし、「田園都市国家構想と家庭基盤の強化」を政治路線とした。「国のもとには家にあり、家のもとには身にある」という格言がある。私は、大平さんの政治姿勢や路線から、正直に身をただすことを政治の原点とする、という故人の心情を理解した。

昨年（五十五年）五、六月、ダブル選挙になったころの大平さんの心労は大変なものだったと思う。外に怒りを発することを慎んだ人だけに、内に耐えがたいものを蔵していたと思う。それが、あの選挙告示日の、いつもと違う激しい演説になったと考えられるが、その日の夜、彼はとうとう病に倒れた。病床を見舞った私は、大平さんから後事を託された。彼は、選挙のこと、サミットのことを心配し、「申しわけない」と繰り返していた。

後日、郷里香川県の後援会の人たちが病院を訪ねたそうだ。そのとき、医師団が病状を心配して大平さんに会わせなかったとのことだが、あとでそれを知った故人は、一つの詩をつくり届けさせたという。その詩は、こういうものであった。

得病更知旧友情
明常思長夜之愁

私は、これを聞いて大平さんの心中を思った。国事多難のとき、病を得て病床に臥し、寝つけないまま一晩じゆう国を思い、ついに明け方を迎えた病宰相の心中である。苦しく、つらい日夜だったであろうと察した。

私は、その大平さんの気持ちに強く打たれた。彼の歿後、私も、彼のために一つの詩をつくった。

「有感」 感ずるところありと題するものである。つたないものであるが、「大平正芳」の四文字を織り込ませてもらった。

大義名分政治道
平平坦坦彼心情
正気発時似鉄牛
芳名永久飾青史

志半ばにして倒れた大平さんは、さぞかし残念だったに違いない。だが、その死は決して無駄にはならなかつたし、芳名は永久に歴史に残るものと思つ。

いまはただ、大平さんの冥福を祈るより仕方がないが、このよき心の友に先立たれて、私も淋しさを禁じ得ない昨今である。もって大平さんを偲ぶ言葉としたい。

(前自由民主党副総裁)